

1. 中学部の基本的姿勢

1. 中学部経営の基本的姿勢

中学部の指導は、小学部での身辺自立・基本的生活習慣の確立をめざした自立化を中心とした指導の強化・拡充と取り組む中で、高等部での職業化を中心にした指導の準備としての指導が模索されている。

このことは、中学部の存在が小学部から高等部への橋渡しの存在と見られがちであるが、決してそうではない。義務教育の最終段階としての、社会的な巣立ちを目標をもって、本校の独自に開発した段階別教育内容表を具体化しながら日々実践と取り組んでいる。

小学部が自立化を重点に置き、高等部が職業化に重点を置くという表現をするなら、中学部では、社会化を中心に置く指導とすることができる。

社会化を目指す子ども達は、「友だちと一緒に生活する子」であるという考えに立って、少しでも集団の中で活動できるようになることを念頭に置いて、指導計画を立案し、生活を大切にしたい指導を心がけている。

以上の事柄を具現するために、中学部では、次の2点にしばらく指導の重点を考えている。

- (1) 日常生活（社会生活）に必要な基礎的な事柄を素直に表現するようになる。
- (2) 仕事や運動に力いっぱい取り組んでいく。

2. 中学部生徒のめざす人間像

精神薄弱教育では、それほど長い歴史の中ではないが、いつも「何を」「どのように」「何のために」指導するのかが模索され続けてきた。それは丁度、振り子が往復するような議論で、いっこうに進歩がないようである。今でも、精神薄弱教育ではその傾向がないとは言わないが、現実にはめざす目標がなければ、指導に一貫性を欠くことになる。

そこで本校の中学部では、創設以来一貫して、「生活の中で生きて働く力を身につけた子」の育成をめざし、指導と取り組んできた。

「生きて働く力」を一口で説明することは難しいが、『学習した事柄を単に理解させているだけでなく、生徒自身の生活の中で確実に身につけて役立っている姿』の中に、その本質を求めることができる。

したがって中学部の学習形態は、生活を重視する「生活単元学習」と「作業学習」が中心となり、指導内容は生活の拡充・深化という観点から精選され組み立てられることになる。

以上、中学部のめざす人間像について述べたが、中学部の各学級では、生徒個々の発達の様相を細かく分析し、現時点で「何を」「どのように」指導していくかについて、重点目標を設定して指導している。

3. 中学部の学級経営の基本姿勢

昭和63年度における中学部の学級経営の基本方針を次のように話し合っ

定した。

- (1) 生活日課をできる限りパターン化して、生徒にその軌道を歩ませながら、徐々に生活化していく。(日課の工夫)
- (2) 運動・体力づくりを重視して、諸活動の根本となる体づくりに重点を置く。(からだづくりの工夫)
- (3) 教科的指導はできる限りさける。教科的指導の場合でも、常に生活を意識した指導に徹する。
- (4) 作業学習は啓発経験を重視し、教師の特性を生かした指導を心がける
- (5) いちおう指導すべき内容の重点を教科別に示すと、次のようなものである。

* 言語的内容・・・日常会話・日記・作文・劇表現

* 数量的内容・・・日時・時計・金銭

* 社会的 content・・・公共物の利用・集団参加(友だちの中での活動)

* 自然的内容・・・季節感・動植物とのかかわり

* 情操的内容・・・(音楽)既習曲(愛唱歌)・みんなで合奏
(美術)絵画・はり絵・粘土

* 健康的内容・・・リズム・ボール・サーキット

* 作業的内容・・・啓発経験としての作業(農耕・園芸・木工・陶芸・被服・調理・軽作業等)

* 養訓的内容・・・配慮養訓と抽出養訓

以上、中学部の学校経営の基本姿勢について共通理解している点について述べたが、これを受けて各学級では生徒の実態にあわせて学級経営の重点(指導の重点)を設定し、日々の実践と取り組んでいる。

4. 中学部の日課表

学部経営の基本姿勢・学部のめざす人間像・学部の学級経営の重点について述べてきたが、具体的な指導は本校の段階別教育内容表(教育課程表)をもとに、月別展開案を作成し、日々の実践がなされている。

中学部の生活日課の特徴は、3年前から従来の学級を中心とする教科中心の指導を「生きて働く力の育成」という立場から見直し、生活の中での活動を重視した合同学習を時間帯に設定し、毎日反復学習することで諸能力の伸長を試みたことである。

生活日課表の中では、1～2校時を充当し、学級での指導と組み合わせ、これを「朝の活動」として共通理解を深めながら取り組んできた。

朝の活動は、指導Ⅰ～指導Ⅲに分け、Ⅰでは登校時の日常生活指導を中心に、Ⅱでは養訓的内容や合奏・劇活動等を中心に、Ⅲでは体力づくりを中心に組み立てた。

生活日課表の中で、前年度の取り組みから特に改善を試みた点は、指導Ⅲの体力づくりへの取り組みである。

昨年度の駆け足運動中心の指導を、サーキット運動・ボール運動・リズム運動に分けて、年間を通して指導できるような45分を基準に反復学習できる指導過程を作成し、その軌道を歩ませることによって教師の側からの合同指導体制を強化したのである。詳しくは研究の項で述べる。